

学生相談室の活動報告 —1994年度から1998年度10月現在—

林 もも子

Student counseling room report from 1994 to 1998

Momoko HAYASHI

1993年度に駒沢女子大学が開学し、就任時より、学生相談室を開室したいと希望したところ、部屋を研究室の並びに提供していただき、1年間の準備期間を経て、1994年度より、学生相談室を開いた。ここに、その5年間、といっても1998年度は10月現在の半年だが、その活動報告をする。

1. 開室時間、設備

開室時間は原則として毎週月曜日と水曜日の、10時から16時である。ただし、1995年度のみ、講義の関係で水曜日は11時から16時となった。1995年度は継続相談で休み中もカウンセリングを必要とする学生が数名いたため長期休暇中も数回開室したが、それ以外の年度は、原則として講義期間中に開室した。場所は、大学館5階の506の部屋である。設備は、面接用ソファセット、箱庭療法用具、記録保管のための棚、記録用机と椅子を用意していただいた。心理テスト（Y G性格検査、東大式エゴグラム、P Fスタディ、ロールシヤッハテスト、T A T）、また、風景構成法施行のためクレヨンと画用紙、事務用品を研究費で購入した。

2. 利用状況の年度別の推移

最初に、利用状況の推移を年度を追って概観する。(表1)

(表1) 学生相談室 利用状況

	利用人数	利用のべ人数	開室日数	一日平均利用者数
1994年度	43	78	59	1.3
1995年度	44	144	71	2.0
1996年度	32	56	33	1.8
1997年度	27	45	57	0.8
1998年度(半期)	26	33	35	0.9

開室1、2年目は利用人数、一日平均利用者数ともに増えたが、1996年度に、カウンセラーが7月に病気で一ヶ月休室し、さらに11月から2月に産休のため休室した。このため、学生相談室は後半実質的に機能しなくなり、その影響が1997年度の利用人数の減少につながったと考えられる。さらに、1997年度から、それまでは1年生のほとんどが受講していたカウンセラーが担当である心理学の講義を1年生が受講できなくなった。このため、例年200人近く受講していた学生が20人に減少し、カウンセラーの存在が遠くなったことも利用人数の減少につながった可能性がある。このため、1998年度は新入生オリエンテーションで学生委員会のメンバーの1人として学生相談室の紹介をしたところ、若干利用者数が増加した。

3. 学部、学年別に見た利用者数

次に、学生相談室利用者の学部、学年別の内訳を表2に示す。1996年度より、短大の学生の相談もあわせて行なった。「その他」というのは、教務課から個別に相談を依頼されて行なった、駒沢学園女子中学の生徒および教官の相談であり、1の利用者数には含まれていない。

(表2) 学生相談室利用者の学部、学年別内訳

		1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度半期
日本文化学科	1年	14	4	6	1	3
	2年	8	7	1	0	5
	3年	—	7	1	2	3
	4年	—	—	4	1	0
国際文化学科	1年	2	13	6	4	1
	2年	19	7	2	2	4
	3年	—	4	1	0	0
	4年	—	—	2	1	0
短大・保育科	1年	—	—	0	4	0
	2年	—	—	1	0	5
短大・英文科	1年	—	—	4	5	4
	2年	—	—	1	5	1
短大・生活科	1年	—	—	3	2	0
	2年	—	—	0	0	0
その他		1	1	0	0	1

1996年度は、大学新設以来初めての卒業生であるためか、4年生の相談者が6人と比較的多かった。その後、3、4年生は1、2年生と比較して相談者が少ない。これは、学年が上がるにつれて、ゼミの指導教官との関係が安定し、そちらでかなり支えられているため、学生相談室を必要としないのではないかと考えられる。

4. 相談内容

次に相談内容を、まず、進路、対人関係、心理性格、家族、ガイダンス、に分けて年度ごとに表3に示す。ただし、重複して複数の内容を相談した学生もある。

(表3) 相談内容

	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度半期
進路	8	6	15	9	12
対人関係	8	11	6	3	7
心理性格	30	31	14	12	8
家族	3	1	0	0	1
ガイダンス	0	0	0	4	0

心理性格、対人関係、進路の相談が多くみられた。対人関係の中では友人との関係が最も多いが、教官、恋人との関係などの相談もあった。内容は守秘義務があるため詳しくは報告できない。

次に、継続的にカウンセリングを行なった事例と、その中で医療的介入が必要と判断され、精神科を紹介した事例数を表4に示す。

(表4) 継続相談者数、医療的介入の事例数

	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度半期
継続相談者数	3	5	5	4	4
医療的介入事例数	0	2	1	1	0

医療的介入を必要とした事例の結果を簡単に報告する。1995年度は2名が医療的介入を必要とすると判断されたため、精神科を紹介した。このうちの1名はその後、休学したため、カウンセラーが研究日にカウンセリングを行なっている開業のカウンセリング・センターで継続に関わったが、最終的に退学し、精神科通院中である。もう1名は、数ヶ月で改善したため、精神科および学生相談室でのカウンセリングを終結し、その後、再び不定期に対人関係の問題で来談することもあったが、短期に問題を乗り越えて卒業した。

1996年度は、1名が医療的介入を必要とすると判断して精神科と開業のカウンセリング機関を紹介したが、その後、カウンセラーが産休にはいったため、フォローアップができず、結局2年休学し、その後、復学した。

1997年度は、1名が医療的介入を必要とすると判断して精神科を紹介し、また、休学したため、カウンセラーが研究日にカウンセリングを行なっている開業のカウンセリング・センターで継続に関わったが、最終的に退学し、専門学校に進路変更した。

5. 最後に

短い期間であり、また、折角活動が軌道に乗ってきたかと思われた矢先の3年目にカウンセラーが体調を崩したり産休に入るなど、十分な学生相談活動が展開できなかった。また、側聞するところでは、指導教官が相談室利用を勧めても「病人扱いするな」と怒る学生があるなど、学生相談室に対する偏見も一部には残っているようである。教育、研究活動との両立の難しさから、学生相談室についての広報活動を怠った結果であると反省している。

しかし、学生相談室に関わった学生に対しては、数こそさほど多くはないが、多少の支えや援助ができたのではないかと考えている。特に、医療的介入を必要とする学生に対しては、専門的な判断と適切な介入が不可欠であることを改めて実感した。このようなクリニック機能以外に心理教育的な方面にも活動の幅を広げていく事が今後の本学の学生相談室の課題であると考ええる。